

● 学会発表の内容

Medroxyprogesterone Acetate (MPA) を併用した新しい調節卵巣刺激法の有効性について

医療法人社団 徐クリニックARTセンター
中塚愛 清須知栄子 伊藤真理 峰千尋 徐東舜

■ 【要旨】

調節卵巣刺激の際のMPA併用が、調節卵巣刺激のパラメーター、LHサージ、胚発育その後の妊娠成績等へ影響を与えるかどうか検討した。2016年4月～2016年7月までに、採卵が初回の患者12症例にMPA併用の調節卵巣刺激を行った（MPA群）。同時期にLHサージ抑制にGnRHアンタゴニストを使用した15症例を比較対象とした（アンタゴニスト群）。MPA群は、月経3日目からhMGとMPA（1日量10mg）を連日投与した。MPAは、トリガー投与日まで内服した。トリガーとしてはGnRH-アゴニストを用いた。アンタゴニスト群は、卵胞14mm以上からGnRH-アンタゴニストを投与した。MPA群、アンタゴニスト群のそれぞれの調節卵巣刺激の結果を示す。hMGの投与量は 2337.5 ± 544.4 vs. 1950.0 ± 403.9 mIU/ml, hMGの投与日数 9.0 ± 1.4 日 vs. 8.2 ± 1.1 日, トリガー投与日のE2は 3077.7 ± 959.4 vs. 3687.9 ± 1255.8 pg/ml, LHは 0.9 ± 0.6 vs. 0.6 ± 0.4 mIU/ml, そしてP4は 0.8 ± 0.3 vs. 0.7 ± 0.3 ng/mlとなった。両群間にhMG投与量のみMPA群が有意に多かった ($P=0.04$)。また、いずれの群も自然排卵した症例は認めなかった。採卵および胚発育の結果について示す。採卵数は 15.6 ± 5.2 vs. 18.6 ± 9.2 , 分割率は73.8% (138/187) vs. 71.7% (200/279), 胚盤胞形成率は55.1% (76/138) vs. 48.5% (97/200) となり両群間に差を認めなかった。妊娠の結果について示す。移植あたりの妊娠率は57.1% (8/14) vs. 75.0% (9/12), 流産率は25.0% (2/8) vs. 0.0% (0/9) となり両群間に差を認めなかった。以上より、MPA併用の調節卵巣刺激法は従来法と同様に有効な方法と考える。